

特集 1. 思考特性を理解する

第3回 家づくりにおける限定合理性**

平成 20 年 8 月 26 日

□ 限定合理性と家づくり

ヒトは常に論理的に考え、合理的な結論に至るのではありません。[前回の記事](#)で紹介したとおり、ヒトはむしろ「限定合理的な存在」であるといえるのです。

そのため、論理的な飛躍に気付かずに、安易に建築思想に傾倒してみたり、住宅に余計な技術投資をしてしまうケースがあるのです。

□ 空間技術論と前件否定の錯誤

例えば、ある思想家が「都市化・文明化の弊害（環境汚染、健康被害など）を被った住環境は、非人間的環境である」と言ったとしましょう。もちろん、この発言内容は、正しい内容といえます。

しかし、これを根拠に、「都市化・文明化の弊害を免れた住環境は、人間的な環境である」と主張したらどうでしょうか。恐らく大方の人は「そのとおりだ！」と思うはずですが、しかし、一連の主張は、論理的には誤っているのです。

一般に、「P ならば Q である」という条件が成り立っているときに、「P でない。したがって Q でない。」としたり、「Q である。したがって P である。」とするのは、論理的には誤っています。前者のような誤りを「**前件否定の錯誤**」、後者を「**後件肯定の錯誤**」といいます。分かりやすいように、以下に具体例を挙げてみます。

条件：「私は街を歩いている。ゆえに、街には人がいる」(真)

- a. 「私は街を歩いていない。ゆえに、街には人がいない。」(偽：前件否定の錯誤)
- b. 「街には人がいる。ゆえに、私は街を歩いている。」(偽：後件肯定の錯誤)

この場合「私」と「人」が実質的に同じ場合にのみ、a, b のような推論は成立します。同様に、「人間的であること」の意義が「都市化・文明化の弊害を受けるか受けないか」のみによって決まる場合にだけ、先の主張は成立するのです。

** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

そのため、仮に先の主張が正しいとすれば、都市化・文明化の弊害を受けていなければ、どんな環境であっても、ヒトは人間的な暮らしができることになるのです。

それでは、例えば都市で暮らす家族との離れ離れの郊外生活や、^{いしよくじゅう}医職住に不自由する老後なども人間的といえるのでしょうか。こう考えてみると、様々な反例[†]が思い浮かぶはずで

□ 共変性の錯覚

このように論理の飛躍や強引さに気付かずに、その思想の非現実性を看過してしまうことはよくあることです。しかし、この他にも、論拠の不十分さ、そのものにも気付かないこともよくあります。その代表例が共変性の錯覚なのです。

我々は 2 事象間に共変関係[‡]が存在しない場合でも、共変関係が存在すると判断する傾向があります。これを共変性の錯覚[†]といいます。

本来 2 つの事柄（事象 X と事象 Y）の間に共変関係が成立するか調べるには、表 1 に示した 4 つの可能性（A, B, C, D）について全て調べないといけません。

表 1 共変性を検討するマトリクス⁵⁾

	事象 Y	
	生起	非生起
事象 X・生起	A	B
事象 X・非生起	C	D

表 2 家族のコミュニケーションと知能

	コミュニケーション	
	多い	少ない
有名中学・合格		?
有名中学・不合格	?	?

最近、「頭のよい子が育つ家」⁶⁾、「頭の良くなる家」などが流行りましたが、実は、表 1 でいえば A の事例しか調査できていないのです（表 2）。にもかかわらず、我々は、家族のコミュニケーションと知能との間に、共変関係、さらには因果関係が成立していると解釈してしまっているのです。

□ 偏った情報収集

このように物事の理解に論理的な誤りが生じることもあるのですが、それ以前に、ヒトには偏った情報収集をしてしまう傾向もあるのです。具体的にいえば、ヒトには考えや仮説を支持する情報を選び好んでしまったり、仮説と反する事例を過小評価する傾向があるのです。これを**仮説確認バイアス**といいます。

例えば、恐らく読者の多くは、「(京都の)町家は環境共生住宅である」とお思いだと思います。

[†] 最近のシニア層を中心とした都心回帰現象など

[‡] 文字通り一方が発生すればもう片方が発生し、一方が発生しないときにはもう片方も発生しない関係

坪庭などを利用し、自然の力で夏を涼しく過ごすのですから、確かに環境共生住宅であるといえるかもしれません。しかし、私はそうは思っていません。なぜなら、町家の冬は寒いからです。

しかし、こうした自然環境と建築的工夫だけでは快適とはならない事例は無視、または過小評価されているのです。試しに、[CiNii†](#)などで「町家 夏」として検索をしてみてください。多くの論文が検索されるはずですが、ところが、「町家 冬」と検索してみても、ほとんど論文は見つからないはずですが。恐らく、意図的ではないにしても、冬季の室内環境については、体系的な調査がほとんどされていないと予想されるのです。

□ 思想家・技術者・消費者もヒト

これまで説明してきたとおり、ヒトは少なからず論理的な飛躍を起こしたり、偏った情報を集めたりしまいがちです。当然ながらこのことは、消費者だけでなく、建築思想家や技術者にも当てはまるのです。なぜなら、彼らも人間だからです。

要するに、建築思想や家づくり論も、実は既に「ヒトの思考・心理特性」の影響を受けているのです。だからこそ、建築思想や家づくり論を、改めて理詰めと考え直すと、論理的に不十分な点が現れてくるのです。

こうして考えると、私の意見含め、「**全ての建築思想、家づくり論も盲信・過信には値しない**」といえるのです。にもかかわらず、日本人には、建築思想や家づくり論に依存してしまう傾向があるように思います。ではなぜこのよう傾向があるのでしょうか。この点は非常に重要なポイントですので、次の [最終回](#) にて詳しく説明をしていきたいと思えます。

* 記事の感想をお聞かせください

[アンケート画面へ](#)

参考文献

- (1) 市川伸一. [考えることの科学](#). 中央公論社, 1997.
- (2) 市川伸一 (編). 認知心理学 4 思考. 東京大学出版会, 1996.
- (3) アントン・シュナイダー. パウビオロジーという思想. 建築資料研究社, 2003.
- (4) 日本パウビオロジー研究会 (編), 石川恒夫 (監修). 日本で実践するパウビオロジー 健やかな住まいづくりのために. 学芸出版社, 2006.

† NII 論文情報ナビゲータ。代表的な論文検索サイト。検索は無料です。

- (5) 村田光二. 共変性・随伴性の錯覚. 社会的認知ハンドブック, 216-217. 大路書房, 2001.
(6) 四十万靖. 頭のよい子が育つ家. 日経 BP 社, 2006.